



讃良郡条里遺跡出土 馬具を装着した白馬を描いた絵馬

もくじ

- P. 2 ● 文化財講座点描
● 郷土の文化財を見学する会
● 第45回 大阪府埋蔵文化財研究会
- P. 3 ● 韓国から研究者来訪
● 久宝寺遺跡体験発掘
- P. 4 ● 北部調査事務所 体験学習いろいろ
● 佐原 真先生と弥生文化博物館
- P. 5 ● 久宝寺遺跡現地説明会
● 瓜生堂遺跡現地見学会
- P. 6 ● 小路・高宮・讃良郡条里遺跡現地説明会

- トピックス
* 讃良郡条里遺跡出土の絵馬
- P. 7 ● Villa Romana a Cazzanello の
2002年度の調査
- トピックス
* 瓜生堂遺跡出土の銅銭を納めた土器
- P. 8 ● 弥生文化博物館のご案内
● 近つ飛鳥博物館のご案内
● 日本民家集落博物館 催しご案内
(1月～3月)

文化財講座点描

第6回 10月16日

『博多湾—古代・中世の国際交流の舞台—』

池崎譲二氏（福岡市教育委員会）

大陸・半島に近いという地の利を活かした博多が日本の対外交流の玄関口としての役割を担ったことを、国家的迎賓館としての「鴻臚館の時代」・11世紀後半からの日本と中国との貿易における中世交際都市としての「博多の時代」として論じていただいた。地下鉄工事に伴う発掘調査によりこれらのことが明らかになったが、その時のスライドを活用したご講演であった。蒙古来襲に際して築かれた元寇防塁や秀吉の朝鮮侵略の兵站地として強化のために築かれた護岸の跡等も見ることができ、大陸へ向かう時には常にその舞台になった博多が印象深かった。

第7回 11月20日

『中世の港町—大物遺跡（ダイモツ）—』

岡田 務氏（尼崎市教育委員会）

大物遺跡は平成7年の調査で新規発見された遺跡である。この遺跡からは平安末から中世初期の土師器、瓦器、国内産陶器、貿易陶磁器、木製品、銭貨、石鍋・温石、動植物遺体、1,000点以上の経石等が出土した。このことから国の内外の物資の集積地であり、また、文献史料上大物浦から船出する記事が見られ、双方から大物遺跡の海上交通の要衝としての繁栄を見ることができるというご講演をいただいた。現場のスライドで出土したばかりの漆器碗の朱の鮮やかさとともに港としての大物遺跡を認識した次第である。



第7回 岡田 務氏

郷土の文化財を見学する会

第3回例会は7月14日（日）に柏原市の柏原市立歴史民俗資料館、高井田横穴群、玉手山古墳群等を訪れました。

講師の石田成年氏には各遺跡を解説していただき、かつ、普段は見ることのできない高井田横穴も、便宜を図っていただき見学できました。

第4回例会は9月8日（日）に主に街並展示を中心とした大阪市の「住まいのミュージアム」と、主に農家を中心とした豊中市の「日本民家集落博物館」を訪れました。

展示の主題が住居である両博物館ですが、両館の学芸員の解説により、住居の性格、歴史、展示方法の違いを比較して学ぶことができました。

第5回例会は10月12日（土）に藤井寺市及び羽曳野市に位置するの古市古墳群を訪れました。

幾度か訪れている古市古墳群ですが、今回は同古墳群の南西部域を探索しました。講師の上田睦氏には、最新の円筒埴輪研究を基に各古墳の説明をしていただきました。

第6回例会は11月17日（日）に大東市の古堤街道を歩き、野崎観音を訪れました。

講師の黒田淳氏には、古堤街道や東高野街道沿いの史跡を、大東市の歴史に位置付けた解説をしていただき、街に埋もれた歴史を再認識させていただきました。



見学する会 第4回例会 日本民家集落博物館にて

第45回 大阪府埋蔵文化研究会

平成14年9月21日（土）に第45回 大阪府埋蔵文化研究会を開催しました。

「自然科学的方法を用いた近年の発掘調査成果」—大阪府内の事例から—が今回のテーマであり、6本の発表と1本の記念講演を行ないました。遺構、遺物の自然科学的手法による保存、自然科学的分析によって得られる情報とその成果、今後の可能性を考えることが研究会の目的です。

発表は当センター山口誠治の「埋蔵文化財と自然科学の調査」から始まり、大阪府教育委員会西川寿勝氏の「低湿地における昆虫化石の抽出—志紀遺跡の発掘成果をめぐって—」、（財）東大阪市文化財協会松田順一郎氏の「堆積物・土壌からみた遺跡のなりたち—東大阪市楽音寺、池島遺跡の事例—」の2本の発表の後、「年輪年代法測定法研究の現在」と題し奈良文化財研究所光谷拓実氏に記念講演して頂き、午前の部を終了しました。

午後からは（財）大阪市文化財協会伊藤幸司氏が「（財）大阪市文化財協会における保存処理の現状—金属器と木器



奈良文化財研究所 光谷拓実氏による記念講演

を例に一」、柏原市教育委員会北野重氏が「大県遺跡の鉄滓分析」、堺市立埋蔵文化財センター嶋谷和彦氏が「堺環濠都市遺跡における鋳造銭の分析成果」の発表を行ないました。

各発表の後、発掘調査担当者のみならず、自然科学系の研究者も交え、内容の濃い活発な討議がありました。

日頃、あまり顔をあわすことがない異なった分野間の研究者が集まり、お互いへの見解を披露しあったことは、今後の研究、および交流に大変有意義であったと思われます。

韓国から研究者来訪

本年7月以降、韓国からの研究者の来訪があいついだ。

7月2日 (財)木浦大学の崔 盛洛氏他3名。

7月17日 (財)慶南発展研究院歴史文化センターの李 盛周氏他6名。

7月22日 全羅南道 霊岩陶器文化センターの任 喜星氏と松廣寺聖寶博物館の韓 盛旭氏。

7月25・26日 慶南大学校の李 相吉氏他5名。

8月22～24日 釜山大学の金 斗喆氏他2名。

いずれも、当センターの施設や発掘調査現場、博物館の視察をされたが、金 斗喆氏は大庭寺遺跡をはじめ初期須恵器を対象とする、国際新聞社の取材に同行しての来訪であった。発掘現場は久宝寺遺跡の墳丘墓や古墳調査を視察された。



(財)慶南発展研究院歴史文化センターの諸氏

久宝寺遺跡体験発掘

大阪府立今宮高校

当センターは大阪府立今宮高校総合学科の夏季集中講座『考古学入門』の協力要請を受け、これを快諾した。実習場所は昨年度と同じく久宝寺遺跡と決定し、中部調査事務所調査第五係の職員が担当にあたった。

実習期間は7月29日(月)から8月2日(金)の5日間。参加生徒は2年生及び3年生合わせて13名である。

実習内容は外業実習、内業実習、勉強会に大別され、外業実習では土層の観察・土器の出土状況実測など、内業実習では土器の接合・拓本および観察、また勉強会では各時代の概要、土器の観察、生徒達による成果発表などを行った。

連日酷暑が続いたが、生徒達は休憩時間をも惜しむように作業に熱中しており、いずれの実習においても少しでも多くのことを学ぼうと真摯な態度で臨んでいた。勉強会や土器の観察ではできるだけ生徒に質問をなげかけ、生徒達の考えを引き出すことを心がけた。

近つ飛鳥博物館行事

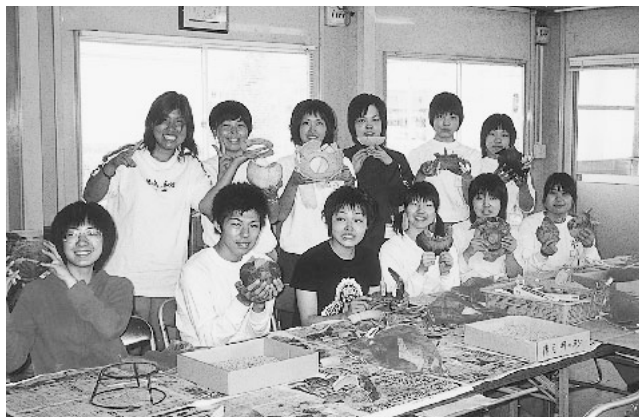
11月10日(日)、近つ飛鳥博物館の行事の一環として発掘現場見学会が催され、10数名が久宝寺遺跡を訪れた。

はじめに久宝寺遺跡の説明をおこなった後、実際に発掘現場におり、土層の観察、足跡の掘削をおこなった。

土層の観察では低湿地遺跡における土の堆積の説明と分層をおこなった。説明を受けただけではなかなか理解しがたいようすであったが、実際に土に触り、その感触を確かめることによって徐々に理解し、思い通りの箇所に分層していた。また、足跡の掘削では、スプーンやヘラなどを使って丁寧に砂を掻き出していた。中には、自らが掘りあげた足跡とともに記念写真を撮る人もいた。

その後室内に入り、遺物の洗浄と拓本をおこなった。当初、参加者は普段手にとることのない考古遺物にふれたためか、緊張した面持ちであったが、作業が進むにつれて緊張もほぐれていき、それらが使われた時代や用途などについて積極的に職員に質問していた。

これらの体験学習をととして参加者が考古学を身近に感じることができたら幸いに思う。(永野 仁)



復元した土器とともに記念撮影(今宮高校生)

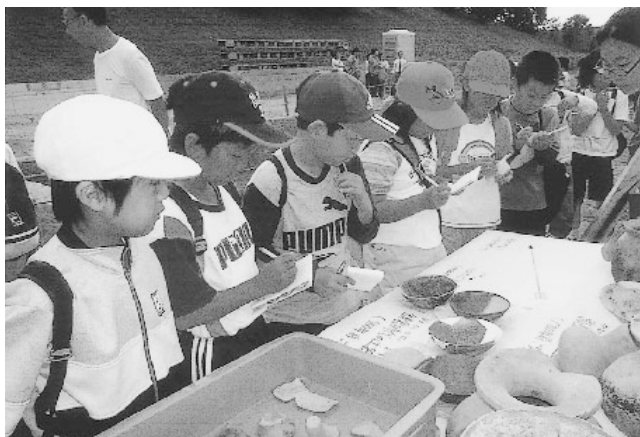
北部調査事務所 体験学習いろいろ

10月16日、豊中市立箕輪小学校の生徒たちが、調査中の勝部遺跡を見学に訪れました。勝部遺跡は昭和42年、大阪国際空港の拡張工事の際に、弥生時代中期の木棺墓群がまとも見つかったことで著名な遺跡で、猪名川流域における弥生時代の中心的集落遺跡とされています。今回の発掘調査は空港周辺の緑地整備事業に伴うもので、平成13年度から2年間にわたり調査を進めた結果、弥生時代後期の川や水田、古墳時代前期の集落、中世の集落などが調査されています。

当日は3年生から6年生の生徒、総勢190名が、学年ごとにわかれて調査現場にやってきました。残念ながら、見学することのできた調査区はせまい範囲のものでしたが、担当者の説明にうなずいたり、首をかしげたりしながら、弥生時代から中世の遺構面でみつかった溝や穴、穴のなかに捨てられた土器などを興味深く観察していました。また出土遺物の説明では、弥生土器が用途によって形が異なることや、石のやじりがみつかったことからこの周辺で狩りが行われていたと考えられること、中世の土器は今使っているお茶碗と変わらない形をしていることなどの説明に納得しているようでした。

質問の時間では「縄文時代の縄文土器や弥生時代の弥生土器があるのに、なぜ古墳時代の古墳土器や奈良時代の奈良土器がないのですか」といったものや、「どうして土器の形は時代によって変わるのですか」といったすどい質問もあり、担当者が冷や汗をかく場面もありました。

遺構や遺物の説明の後、弥生土器や瓦器碗、土師皿などの出土遺物を間近で見学してもらいました。また、実際に弥生土器の破片をさわって、その感触を確かめてもらいました。石のやじりや古墳時代の玉など、間近でみてはじめてその形がわかる遺物もあり、感想文にも「土器の感触がザラザラしていた」や「やじりや玉は小さいけれどきれいだった」といった文章がみられました。中には破片から土器の復元に挑戦する生徒もいて、楽しい雰囲気の中で遺跡を感じてもらえたこととおもいます。



箕輪小学校生徒による勝部遺跡の見学

また、11月6日から8日にかけて、職業体験として吹田市立高野台中学校2年生の5名（11月6～7日）と、箕面市立第一中学校2年生の1名（11月7～8日）が北部調査事務所で作業を行いました。残念ながらこの期間、発掘調査を実施している現場がなかったので、出土遺物の整理作業のうち、土器洗いと土器の注記を中心にした作業を体験しましたが、とくに土器に小さい字を書く作業には苦労していたようです。一方、野外での出土石造物の洗浄作業は少し冷たい風の中でしたが、楽しげな様子でした。



中学生による石仏の洗浄作業

佐原 真先生と弥生文化博物館

今年の7月10日、多くの人々の願いも届かず、「やさしさと情熱の考古学者」佐原真先生が亡くなりました。

佐原先生には、昭和61年に弥生文化博物館の基本構想策定委員会に参加していただいたから、開館後の博物館運営協議会委員長として、お亡くなりになる迄一貫してお世話になりました。先生には弥生博を「うちの博物館」といっていただけるほど、力を注いでいただきました。先生発案の展示資料や展示手法が数多くのこされています。その基軸は「分りやすく、見やすく、楽しい展示」です。しかし、先生の域までは遠く、どうしても難しく、硬くなりがちです。まだまだ努力が必要です。

当館では、先生の多大な功績と足跡を偲び、8月17日から約1週間を「佐原真さん追悼週間」としました。期間中、写真展や追悼文集の募集、先生の奥様にもご出席いただいた追悼講演会を開催しました。講演会には坪井清足先生をはじめ生前親しかった方々にお話いただき、多くの方に感銘を与えました。心よりご冥福をお祈りいたします。（石神 怡）



久宝寺遺跡現地説明会

久宝寺遺跡では寝屋川下水道竜華水環境保全センター水処理施設建設に伴って平成13年度より発掘調査を行っている。今年度の調査では庄内式期から布留式期初頭にかけての墳墓を20基以上確認し、この墳墓群を対象とした現地説明会を8月24日に実施した。事前に新聞等で広く取り上げられたこともあり、当日の見学者は800名をこえた。調査現場がJR久宝寺駅前に近いという利便性もあるが、近隣だけではなく遠方からも多数の見学者が訪れている。

発掘調査は東側からA～C区の三つの調査区に分けて実施している。B・C区では20基に及ぶ墳墓・土器溜り等、A区では畑や水田を検出しており、それぞれ墓域と生産域に分かれて土地利用されていることが確認された。

22号墳では底部を穿孔した二重口縁壺が周溝の四隅から出土した。直口壺が墳丘四隅に置かれた1号墳や周溝内から二重口縁壺が出土した15号墳と合わせて当地での土器祭祀の変遷過程を検討する事例になると考えられる。

また、全体的に主体部の遺存状況は必ずしも良いものではなかったが、組合式木棺を主体部とした墳墓が確認されている。これらの墳墓はほとんどが単葬であった。9号墳では組合式木棺の主体部が確認され、頭蓋骨が検出された。29号墳では墓域から管玉が出土し、周溝内でも組合式木棺を確認している。20号墳で確認された組合式木棺は今回調査した墳墓の主体部としては遺存状況が最もよく、見学者の興味もここに集中していた。

また、A区とB区の調査区境で確認された溝より東側では東西方向の畝間溝が確認された。これよりさらに東側でも水田と昨年度調査を行った3～8号墳が確認された墓域を区画する溝を確認している。この溝は断面等の検討により洪水砂等の堆積による埋没後も改修を行うことで長期にわたって使用されたことがわかっている。

今後は、今回の調査地の南側を調査していく予定である。今年度の成果によれば引き続き墓域は広がる様相を示しており、当地での墓制変遷の解明に貴重な事例が明らかになると考えている。

(後川恵太郎)



説明に耳を傾ける参加者

瓜生堂遺跡現地見学会

今年5月より、当センターでは東大阪市若江西新町2丁目において瓜生堂遺跡の現地調査を行っている。大阪府による地下河川建設講じに関連して実施している調査で、本遺跡の調査区面積は約700㎡と小規模である。

5～6月には近世の島畠を2面にわたり検出し、7月には奈良時代後半～平安時代にかけての掘立柱建物群を検出した。この建物群中には最下層に多量の土器類に加えてガラス玉・鉄製鋤先が廃棄されており、古代における井戸への祭祀的行為の一端をみることができた。8～9月にかけてはさらに下層から弥生時代中期後葉の方形周溝墓が2基検出された。2基とも一辺15mを超える比較的大型の方形周溝墓であり、高さ1mにおよび盛土により形成された墳丘を良好な残存状態で観察することができた。また、1基については陸橋部から北方へ直線的に連続する堤状遺構が確認できた。これは墳丘上に至る墓道として機能していた可能性があり注目すべき遺構であった。

この特異な方形周溝墓の状況を公開すべく、地元自治会と大阪府下を中心とする埋蔵文化財関連機関に広報を行い9月15日に遺跡調査の現地公開を開催することとした。見学対象となる遺構は先述の方形周溝墓で、それに伴う弥生土器の一部についても展示を行った。その他の展示遺物は8世紀末の井戸への廃棄遺物群を中心とした。

当日参加者は180名と、新聞報道などを伴わない小規模な現地見学の催物にしては、比較的多くの人々の見学を得られた。大学生を含めた考古学・埋蔵文化財関係者が約50名程度。一般市民の参加が約120名程度で、うち80名程度が東大阪市内の地元住民であった。日曜日ということもあって、夫婦連れや小学生の子連れでの家族ぐるみでの参加者が比較的に目についた。ささやかながら日頃の当センターの調査内容を一般市民・府民に還元する催しが行えたことは幸いであった。興味深げに方形周溝墓を見学する参加者を見て、今後も、更なる工夫を行って広報活動を維持拡大していくことが当センターの課題と感じた。

(若林邦彦)



弥生時代中期の方形周溝墓と墓道

小路・高宮・讃良郡条里遺跡現地説明会

第二京阪道路建設に伴って発掘調査を実施している寝屋川市小路・高宮・讃良郡条里遺跡では、昨年度に引き続き2002年10月26日（土）に現地説明会を開催しました。

公共交通の最寄り駅から遠方にも関わらず、近隣住民の方々を中心にして、279名の参加者がありました。

3箇所の遺跡に分かれているため、遺物展示・パネル展示を中心とする第1会場で遺跡の全体説明を行った後に、



讃良郡条里遺跡 説明風景

讃良郡条里遺跡（第2会場）から小路遺跡（第3会場）、高宮遺跡（第4会場）へと順番に移動しながら、各遺跡の調査成果を担当者が説明しました。

讃良郡条里遺跡では旧河道が発見され、灌漑用の杭を打ち込んだ堰が設けられています。堰のしがらみにひっかかるように絵馬2点や人面墨書土器・人形などの祭祀遺物が多量に出土しました。

小路遺跡では古墳時代前期の前方後方形周溝墓と、それを取り囲むように、方形周溝墓3基が検出されています。いずれも墳丘は後世の耕作などによって削平されて、埋葬施設は残っていませんが、周溝から供献土器と思われる壺が出土しています。

讃良郡条里と小路遺跡は低地ですが、高宮遺跡は丘陵上と斜面に立地しています。古墳時代中期の堅穴住居跡が、丘陵や斜面で20棟以上検出され、集落跡と判明しました。住居が整然と並ぶ箇所もみられ、計画性が伺えます。すべての堅穴住居の壁際には竈が設置されています。

昨年の現地説明会にも参加された人や、地元の歴史に詳しい方もおられ、地域に対する意識の高さを感じました。

（前田義明）

トピックス

<<< 讃良郡条里遺跡出土の絵馬 >>>

讃良郡条里遺跡では、奈良時代末期から平安時代期の川跡から二枚の絵馬と共に人形や斎串、墨書人面土器など多数の祭祀遺物が出土した。当時、都城で盛んに行われた国家祭祀に倣い、この川の周辺でも同様の祭事が執り行われたことが判明した。

川跡は、やや西に振って北へ流れ、幅5～9m、深さ約1.3～1.5mの規模で、3ヶ所にシガラミ（堰1・2、護岸1）が設けてあった。堰1・2は川をやや斜めに横断する状態で、約7mの間隔をおいて配置され



ていた。護岸1は川の西岸に沿って設置され、南側は倒壊した堰2の上に築かれていた。各々は2～3条の杭列で構成され、杭の数は500本近くに及んだ。

絵馬は、護岸1杭列間の底部から小流木を間に挟み、二枚重なって出土した。この状況から二枚を同時に流した可能性が高く、祭事はこの近辺で行われたと想定される。絵馬1（左の写真）は、完存品で、縦14.6cm、横19.6cm、厚さ0.6～0.7cm。躍動感のある裸馬が描かれ、左下隅に「神馬」の墨書がある。これまで出土した35例にこのような文字が添えられた例はない。

絵馬2（表紙カラー写真）は、縦20.3cm、横26.6cm、厚さ0.6～0.8cm。右上が欠損するが、外形寸法では出土例中最大とされた平城京出土絵馬より僅かに大きい。こちらは白い飾馬が描かれており、下地に白色土を塗布した後、馬の輪郭や馬具などが墨で表現される。

彩色絵馬の出土例は僅か5例と少ない。どちらも巧みな筆遣いで表現されており、股間部の脹らみから雄馬とみられる。材質はヒノキ板目材で、上端には掛紐の通し孔を穿つ。共に遺存状態は極めて良く、今後とも絵馬の代表的資料となる貴重な発見であった。

（長戸満男）

Villa Romana a Cazzanello の2002年度の調査

Villa Romana a Cazzanello はイタリア半島西岸中部の Tarquinia に所在するローマ時代の貴族の別荘遺跡である。Tarquinia はローマの北方約100kmにある地中海に面した城砦都市で、城壁で画された内部には旧市街、外部には新市街が広がっている。今回の調査は例年と同じく、東京大学青柳正規教授を中心に科学研究費補助金等によって実施されたもので、当センターからも三宮・西村両技師が調査協力のために派遣された。

調査地は Tarquinia 近郊の海浜部にあり、遺跡の西はすぐ海岸になっている。別荘遺構は海に面して西向きに設計され、改造、改築を重ねながらA.D.1～5世紀まで存続している。調査区のうち、東半部を中心に大半の区域はすでに調査を終え、今回は西端部の前庭半円回廊の周辺で調査が実施された。この南に接した区画から、以前に各時代の浴室群から構成された浴場が検出されているが、今年度は前庭の下層から浴室の焼成炉が検出された。遺構の相互関係からみて、これまでの浴室群よりさらに遡る可能性がある。また、調査区南端の中ほどの貯蔵庫とみられる小区画からは、大量のアンフォラ片が出土した。

なお、浴室の一部については、日本の測量会社によって3Dデータが記録され、立体画像が作成された。

Villa Romana a Cazzanello の機能した時代は、日本で

いえば弥生後期から古墳中期に相当する。しかし、構造物は煉瓦・モルタルで頑丈に組み立てられ、日本の感覚では明治時代の遺構とも思えるほどである。また調査方法や考え方が、イタリアと日本ではかなり異なる点があり、興味をひいた。Tarquinia はエトルリア文化の中心であったため、ローマ遺跡の調査例はかえって稀少であり、一連の調査は地方都市におけるローマ文化を知る上で、貴重な成果をあげている。

(西村 歩)



浴場跡

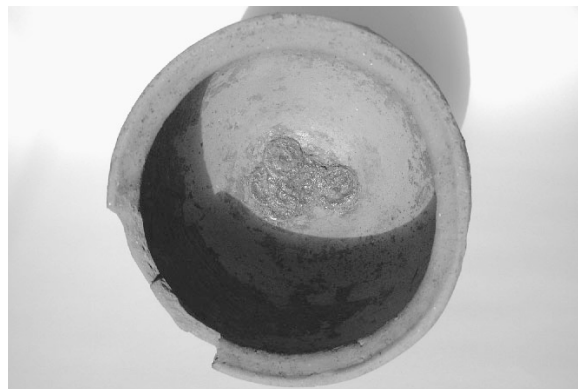
トピックス

<<< 瓜生堂遺跡出土の銅銭を納めた土器 >>>

平成14年度に、大阪府による地下河川建設に伴って発掘調査を行っている東大阪市瓜生堂遺跡では、奈良時代後半～平安時代前半の掘立柱建物群が検出された。集落面には多数の柱穴が検出され、その配置を分析すると、2×3間の規模を中心とする複数の建物が幾度か建て替えられたことが類推できる。

多数検出された柱穴状遺構の一つからは、小型の土師器甕の完形品が出土した。この甕には土師器小皿2枚を重ねて蓋がされていた。現地ではそのままの状態を取り上げて持ちかえり、洗浄すると、甕内底面に5枚の銅銭が貼りついている事がわかった。5枚の銅銭はいずれも劣化が著しく土器から取り外すこともできない状態であったため、土器に付着したままの状態で行ったX線撮影を行った。結果、2枚について表面の文字を判読することができた。1つは8世紀後半が初鑄の隆平名永寶、もう一つは9世紀中葉が初鑄の貞観永寶という皇朝銭であった。銅銭を納めた甕の型式学的年代もおおよそ9世紀と想定されていたため、土器と銅銭の年代はほぼ一致したことになる。

銅銭を納めた土器埋納の性格については、「胞衣壺」や地鎮のためのものなどの諸説がある。祭祀的遺物・遺構の性格を確定することは難しく、ここで詳細な論及は避けたいが、銅銭入り甕に入念に2枚の皿を重ねて蓋がなされていたことは注目される。建物に隣接して何らかの祭祀が行われたことは間違いない。古代集落内部における祭祀の一例を示す資料である。(若林)



底に銅銭の貼りついた土器

弥生文化博物館のご案内

平成15年冬季企画展

(財)大阪府文化財センター設立30周年記念

過去からのメッセージ —大阪発掘30年—

1月25日(土)～3月23日(日)



センター設立以来30年間の主だった発掘調査・研究の成果と最近の新発見資料を紹介いたします。大阪府内各地の考古資料を旧石器時代から現代までおおよそ時代順・遺跡ごとに、センター30年のあゆみとともに展示します。

土面 縄文時代 和泉市 仏並遺跡

(財)大阪府文化財センター蔵

■冬季企画展講演会「新発見で激動する考古学」

2月2日(日)14:00～16:00

講演: 理事長 水野正好 対談: 館長 金関 恕

■主要遺跡調査成果報告会

第1回 2月16日(日) 第2回 3月2日(日)

◆多彩な活動展開中

◇共同研究報告会(3/16)

◇弥生カルチャーフォーラム(3/21)

◇ミニギャラリー:「書・画・篆刻展」

(1/21～2/2)ほか

◇コンサート:「チョコレート色の調べ」(2/11)ほか

◇写真コンテスト・撮影会(3/9)など

平成15年春季特別展 4月12日(土)～6月15日(日)

「弥生創世記—検証・縄文から弥生へ—」

近つ飛鳥博物館のご案内

冬季企画展

「近つ飛鳥の群集墳

—須賀古墳群と飛鳥千塚古墳群」

平成15年1月21日(火)～3月16日(日)

関連事業

◆一須賀古墳群講座「古墳群を歩く」

2月9日(日) 定員: 30名

◆歴史フォーラム「一須賀古墳群と飛鳥千塚古墳群」

講演: 吉澤則男 河内一浩(以上 羽曳野市教育委員会)

山本 彰(本館学芸課長)

2月23日(日) 定員: 200名

◆現地見学会「飛鳥千塚を歩く」

3月9日(日) 定員: 30名



昨年の一須賀古墳群講座の様子

日本民家集落博物館 催しご案内(1月～3月)

◆正月飾り展—民家各地の正月飾りを再現展示—

<1/5(日)～31(金)>

◆民家の囲炉裏で暖まろう

—囲炉裏ばたでのお茶のサービスとわら草履体験—

<1/5(日)～3/23(日)の土日祝 10:30～16:00>

◆囲炉裏に火を入れて

<1/12(日)～3/27(木)の水・木曜10:30～16:00>

◆ふるさとのお雑煮会

—民家のふるさとのお雑煮を囲炉裏ばたで再現販売—

<1/12(金)・1/13(月) 11:00～>

◆餅つき体験

<2/2(日) 11:00～13:00>

◆梅の撮影会

<2/22(土) 10:30～12:30>

◆観梅の頃「梅と箏とトークのひとつとき」

—箏・三弦の演奏と舞—

<2/25(火)、3/1(土) 14:00～15:00/要予約>

◆民家集落作品展(絵画、写真、俳句、その他様々な研究等)

<3/9(日)～23(日) 10:00～16:30>

※2/21(金)～2/23(日)作品募集・受付

◆民家集落公開講座

①「世界遺産白川郷は今」 宇田章二(白川村教育委員会)

②「エコミュージアムの魅力を探る」

瀧端真理子(追手門学院大学)

<3/15(土) 13:30～16:00>

上記の催しについて、詳しくは博物館へお問い合わせください。皆様のご来館をお待ちしています。

(TEL 06-6862-3137)